

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな活動を評価されている一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを描いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちの活動をご紹介します。

第14回は、NHKのディレクターや現地法人スタッフとしてマレーシアに関わり続け、

現在は大学院の博士課程でマレーシアの伝統芸能を研究されている戸加里康子さんにご登場いただきました。

聞き手は法学研究科の相澤美智子です。

食べていだけなら、何とでもなる。

自分の気持ちに正直に、いまできること、やりたいことをやる。ただそれだけです。



現地の人と現地の言葉で話したい。
それが、マレーシアに行ったきっかけです

相澤 高校の先輩後輩としておつきあいを始めてから19年になりますが、NHKを辞めてマレーシアで就職する、ご主人を残してマレーシアに再留学する、と多くの人はなかなか思い切れない選択をスツとなさるたびに、「何と伸びやかな生き方だろう」と内心拍手を送ってきました。そもそもなぜ、マレーシアなのか。

戸加里 マレーシアとの出会いは、大学2年のときでした。東南アジアに一人旅がしたいと先生に相談に行ったら、治安も悪くないし、シンガポールでは近代化されすぎているから「マレーシアがいいんじゃない」と言われたんですね。先生がたまたまマレーシアへ行く予定があって、向こうで会おうかというノリでもあった（笑）。20日ぐらいの旅でしたが、初めての海外一人旅で、とにかくすごく楽しかった。知らない人と一緒にホテルに泊るとか、いま考えると人に薦められないような危ないこともいろいろやったけれど（笑）。

2度目は如水会の留学制度での留学でした。前期から途上国研究をやっていましたし、何となく現地へ行った方がいいという空気があったんですね。私も留学したいと思っていたので、じゃあどこ考えたとき、思い浮かんだのがタイとマレーシアの二カ国でした。途上国研究では、貧困からの脱出を妨げている要因は何かといった観点からの研究もあるでしょうが、私は経済発展しつつある国のいまに関心があつたんです。いまどうなっているのか実際に見たい、現地の人と現地の言葉で話したいと思ったんです。でも、タイ語は難しいから留学までに間にあいそうもない（笑）。如水会留学は1年でしたが、私費で1年間延長しました。

相澤 一橋大学に入学されたときから、途上国研究をやろうと決めていらしたんですか。

戸加里康子（とがり・やすこ）

1988年一橋大学社会学部入学、1991年～1993年マレーシア・マラヤ大学留学

1994年NHK入局、国際局（現国際放送局）制作センター・地域番組部マレー語班

1999年研精舎マレーシア入社

2003年一橋大学大学院（社会学研究科地球社会研究専攻）入学、現在博士課程に所属

著作：情報センター出版局『旅の指さし会話帳⑮ マレーシア』

戸加里 途上国や社会開発への関心は、入学後でしたね。もともと明確な目的があって一橋を選んだというわけではなくて、社会問題について勉強ができそうだから社会学部へ進学した、という程度。当時、国立大学のなかで社会学部があったのは一橋だけでしたから、世界史の先生の薦めもあって、じゃあ一橋大学へ行こうという感じでしたね。

相澤 私が高校2年になったときには、戸加里さんはもう卒業されていました。でも、すごい先輩がいるよとお名前やウワサは私たちにも伝わっていました。東大へ行けと薦められませんでしたか。

戸加里 高校時代は、ヤンチャだったから（笑）。成績があがったのは、受験勉強したときだけ。いまさら志望先を変えたくなかったし、東大はまるで考えませんでしたね。でも、一橋を選んで良かったと思っています。女性を意識して行動したことがないから女子学生の数が少ないのも気にならなかったし、1年の前期からゼミで学べたことも私にとってプラスだったと思います。

いま行きたいと強く思ったから、NHKを退職しマレーシアに向かった

相澤 卒業後はNHKに就職されましたが、国際機関やNPOは考えなかったのですか。

戸加里 言葉を活かした仕事をするか、関心を活かした仕事をするか、考えました。でも、国際交流基金は縁がなかったし、最初に合格したからNHK（笑）。面接のとき、マレー語の放送をやりませんかと言われたんです。NHKは「ラジオ・ジャパン」という日本を海外に紹

介する短波放送番組をやっていて、日本から直接、電波を飛ばしていました。マレー語の放送自体、珍しかったと思います。

「ラジオ・ジャパン」ではディレクターとして、番組制作を担当しました。日本企業などを取材し、台本をつくり、スタッフを指揮する。アナウンサーはマレーシアの人でマレー語で会話をする毎日でしたから、マレー語の力もついたし、仕事そのものは面白かったですね。NHK

を辞めた理由の一つは、短波放送という媒体と番組を届けたい視聴者とのズレを意識するようになったこと。マレーシアの人口は約2300万人ですが、マレー語ネイティブの人はその半分ぐらい。ほとんどの人はインドネシア語がわかるんです。一方、短波放送を聞く人は「短波好き」

が多く、「音がキレイに入った」と内容よりも、そちらを重視する傾向が強い状況でした。もう一つは、人間関係に煮詰まってしまったこと。いま思うと、そこまでではなかったとは思いますが…。

相澤 辞められたあと、マレーシアの企業で働かれていますね。当時もうご結婚されていたと思いますが、単身で行かれるということについて、ご主人はいかがでしたか。

戸加里 夫は、私が暴れて行かせてくれと言ったと言いますが、私にはそんな記憶はない（笑）。マレーシアで働くことにしたのは、「いま行きたい」と強く思ったからです。マレーシア在住の日本人に紹介していただいて、日本のメーカーの現地法人に就職しました。

相澤美智子
法学研究科専任講師





相澤 マレーシアでは何年ぐらい働かれたのですか。

戸加里 1999年から3年半です。私は、日本人のエグゼクティブとローカルスタッフをつなぐコミュニケーション・スタッフとして現地採用されたわけです。でも、マレーシアの人がエグゼクティブになり、コミュニケーション・スタッフを介するの必要がなくなりました。役割もやれることもなくなったのに、居座っては申し訳ないでしょう。日本に戻ってマレー語を活かした仕事をしながら、もう一度大学で勉強しようと思いました。

私は本当に運がいい。
いつも応援してくれる人がいるから。
好きなことができています

相澤 もう一度学生に戻るといふ選択肢も、日本では少ないかと思いますが、戸加里さんがそうできたことには、経済的自立ができるだけの自信と能力の裏づけがあったからだと思います。

戸加里 確かに、マレー語の翻訳や通訳という仕事での収入はあります。でも、食べるだけなら、何とでもできる。いまの時代、普通に働いていたら、食べられないほど困ることはないと思いますね。私は、学生時代、先輩の代役でバイトをしたことがあるんですが、そのお店のご主人に頼まれて、それ以降1週間に6日働くことになった。そこで、仕送りがなくてもやっていける、6日勤務と勉強の両立はできると実感したんです。私はいまに至るまで、やりたいこ

とをやっている。やりたいと思ったとき、応援してくださる人にめぐりあうことができました。人にもよく言われますが、私はとても運がいいと思います。

相澤 人の信頼を獲得し、自然に応援したくなるだけの何かがあるからです。戸加里さんご自身も忙しいのに、いろんなことをやっておられる。NGOのお手伝いもされているそうですね。

戸加里 埼玉県朝霞市に、日本の小学生とマレーシアの子どもの交流をやっているNGOがあるんですが、そこで子どもたちの描いた絵のタイトルを翻訳するお手伝いなどをしています。私がやっているのは、その程度。やっている人がいて、面白そうだから手伝っている。結局、ヤジウマなんです(笑)。人のために何かをしてあげたいと思い、しかもそれを行動に移すのは、とても大変なことだと思いますね。

相澤 いま博士課程の2年目でしょう。大学院では何を研究テーマにされているんですか。

戸加里 マレーシアの伝統芸能、具体的には一部の州に伝わる「ワヤン・クリ」というかけ絵芝居です。かけ絵芝居ではバリ島やジャワ島のものがあるんですが、ワヤン・クリも長い伝統をもつ庶民の芸能なんです。演じるのは村や町の人びとですが、上演するときには芝居小屋を建てるんですね。その際、マントラを唱え、お供えをすることや、芝居の内容がイスラムにそぐわないと、15年前に州政府によって上演禁止になってしまいました。修士論文では、このことを州政府の政策という観点から考えました。この3月にマレーシアに再び留学するのは、この問題を今度は演者側の発言を通して研究したいと思ったから。一応、1年の予定で行きます。

相澤 博士課程を終えられたあと、研究者の道に進むとといったことは考えていらっしゃいますか。

戸加里 あり得ないとはいえませんが、率直に言って未定です。2つの国を言葉でつないで橋渡しをするといった、自分のできることをやる、そのとき面白いと思うことをやるというのが、私の基本的なスタンスですね。楽しいことをやるのは、どんなに頑張ったとしても、努力なんかではないと思う。これから先の人生にも、そうした楽しいことが、一杯あるといいなと思っています。

相澤 3月からの留学も、大いに楽しんできてください。本日は、どうもありがとうございました。

対談を終えて

戸加里さんは、私の高校・大学・如水会留学の先輩である。彼女との付き合いは、いつの間にかとても長いものになっているが、高校で出会った当初、彼女が日本とマレーシアの行き来を繰り返しながら、これほどまでにユニークな生き方を選択していくの

だとは、想像すらしなかった。今回、取材を通して、戸加里さんには何の気負いもないことに気がついた。彼女は、周囲が自分をどう見ているのか、自分に何を期待しているのかなどということに無頓着であるのはもちろんのこと、自分の中でさえ、将来を思い描いて、こうありたい、こうあらねばならないなどと思いついたり、自分にプレッシャーをかけたらず

ることがない。毎日、楽しいと思えることを続けて、生きていく。と同時に、「食べるだけなら、何とでもできる」という腹のくくりもある。このとてつもない生命力と、人生を楽しむだらかさ、これが彼女の魅力なのだと認識した。そういう魅力をもった先輩の生き方を、これからもずっと近くで見させてもらえそうなのが嬉しい。(相澤美智子)